良質な住まいと心地よい暮らし

木の家に暮らす

夢の丸太小屋に暮らす
3月号別冊
13号
定価 1200円

特集
家族といっしょに育つ家

出雲・出西窯を訪ねて
ものづくりがある暮らし

東京下町　築70年の町家に手をかけて
小さなおむすび屋の、古くて新しい日々

良質なデザインとクラフトワーク
工房で生まれた木の家具

木の架構は強くて美しく、心地いい
本物の木組みの家に住みたい

江戸、大正、平成と改修を重ね、手を入れて住み継がれる「日本の家」。そのフレキシブルな間取り

福井県福井市 ― U邸 ― 設計●松井郁夫建築設計事務所

太いケヤキやスギの木の柱が聳え、マツなどの梁が渡され構成される木組みの架構。100年以上長持ちするようにつくられた木の骨組みと、襖や障子など開閉と付け外しが自在な建具によって仕切られた室内で構成される日本の家。建具を開放すればいくつもの部屋をひと続きの広間としたり、閉めればそれぞれが個室にもなる。その場その場の使い方はもちろん、家族構成の変化にも、さまざまな暮らしのシーンに合わせて、いかようにも使い分けられる可変性の高さが大きな特長で、欧米でも高い評価を得てきた。そもそも日本の古民家、伝統的な構法の木の家は、長持ちする架構と自在に変化できる間取りをもっているのだ。

福井県福井市、日本海にほど近い地域に建つU邸。もともとは造り酒屋を営んでいた、江戸安政年間に建てられた家だ。長い時代の間、この地に建ってきたこの住まいは、100年以上の時を経た木の骨組みはそのままに、2004年にしつらえを新たにした。新しい暮らしが入ったその佇まいは、古い歴史と現代の生活にフィットした使い勝手とデザインを得た美しさをもつ。

100年以上の時間の中で、この家は10数回もの改修の手が入れられたという。当初は馬屋や、帳場のある造り酒屋の店があり、囲炉裏もある伝統的な間取りだった。その後昭和30年代に北側奥や側面に下屋を増築したり、昭和40年代には囲炉裏も取り払われた。同時にそれまで室内に見えていた柱や梁はボードやベニヤ板、プラスチックの障子などで覆われてしまった。間取り、内装とも現代的な住宅の様相を加えられたのだった。しかもその場その場の部分的、断片的な改修を繰り返してきたため、しつらえも使い勝手もよくないものとなっていたという。

「今回、改修する前はこの家の古さが、味わい深いというものではなく、ただ古くて汚いものという感じでした。間取りもとても使いにくいもので、住む人のための家ではなく、お客さんのための家だったのです」と奥様。

かつての家は、「ハレ」と「ケ」という概念が根付いていた。『冠婚葬祭などの行事を自宅で行っていたため、来客のための「ハレ」の空間を重視し、家族の日常、「ケ」は二の次だった。U邸でも家族の過ごす空間は家の中央にあり、光や風は入りにくく、また家の中のどこに行くにもほかの部屋を通らなければならなかったという。そんな家を新たな住まいとして蘇らせたのは、この家に嫁いでこの家の古さや使いにくさを実感していた奥様だった。

「次男で、古い伝統的な建物だった実家を出た父から、『古い大切なもの』に対する認識において子供のころから影響を受けたせいでしょうか。100年以上ここに建ってきたこの家をどうにかして残したい、しかも私たちやこれからの世代が住みやすい家にしたいと思ったんです。改修して、太くて力強いこの梁が現れたとき、住む人は何代も変わったけれど、この柱や梁はずっとここにあって暮らしを守ってきたんだ、この家の主役なんだ、と感慨深い思いでした」と振り返る。

改修の設計を依頼したのは、東京の建築家、松井郁夫さん。木組みの家や古民家改修も多く手がける設計者だ。

右ページ／U邸の「集いの間」。「改修するまでは人を呼べない家でしたが、いまではこの部屋にたくさん人が集まります」という。かつての10数回の改修のなかで、横幅も奥行きも増築されたが、当初からの本体の架構はそのまま。重厚な柱と梁によるダイナミックな架構が美しい。**1** 正面の玄関や掃き出し窓などの繊細な木の格子が民家らしいしつらえ。**2** 外観。当初は茅葺きだったが、途中の改修で屋根自体を掛け替え瓦葺きに。下部の下屋も途中の改修でつくられた。**3** 玄関内部。しっとりと落ち着きのある陰影は日本家屋ならではだ

インターネットで『古民家再生』というキーワード検索から始めてたどり着いたという。日本の伝統的な家の設計はもちろん、それに適した自然素材を正しく使うところが決め手だったという。そして、松井さんがこの福井県出身だったことも。松井さんだけでなく、元の家の解体や改修工事に関わる工務店など家のつくり手も地元の業者を選んだ。地域の気候風土を知り、家ができたあともメンテナンスなどで長くつきあうことができる人の手で建ててもらいたかったとUさんは話す。

「ある古民家再生の事例を見学したんですが、そこは木の構造は古いままだけれど、床がテカテカの合板だったり壁も自然の左官壁ではなかったみたいで、強い違和感がありました。確かに便利でコストも抑えられるんでしょうけど。これからもまた何代も住み継がれる家にするなら、便利さやコストよりも、やはりこの100年以上の時間を経てきた木の骨組みに合う素材でなければいけないと思ったんです」

実際、コストと時間は予定よりもかかった。しかし、長い歴史をもつ木組みを元の正しい姿に戻して、さらに現代の家族が暮らしやすい住まいとして、また新たな時を刻み始めたU邸。

「この家は、江戸、大正と時代の違う架構が『入れ子』のように組み合わされていました。その昔の木の架構を読み解き、いまの生活に生かしさらに未来の子供たちの暮らしにつなぐ設計をしました。木組みを本来あるべき姿に戻し、光や風の自然な通り道を確保し、珪藻土など自然の素材で室内を仕上げています」と松井さん。

「私も子供のころ個室をもらっていましたが、寝るまではずっと茶の間でみんなで過ごしていました。この家でもそんな暮らし方をしたいので、子供の個室はありますが、鍵もテレビもありません。板戸や障子は必要なプライバシーを守りながら、声や気配を感じられて、家族みんなのつながりを保ってくれます」。そう話すように、実際に夜寝る前に自室に戻るまで、家族みんなが食堂や居間で過ごすという。また、この家は人が集まる家にもなった。昭和の改修で細かく仕切られた間取りは架構に一致する大らかな間取りとなり、南側の「集いの間」は大勢の親戚や友人が一堂に集える空間になった。

時代が変われば住まい方も変わる。老朽化した部分を手直しすれば、強く適切な架構で組まれた木の軸組みは100年以上も使い続けられる。そして、間取りや設備、仕上げなど、その内部を暮らしに合わせて変更することが比較的容易だ。そうした適切な改修がなされたこのU邸は、またこれから何代も住み継がれていくだろう。

この家の歴史を見守ってきた、美しい木の架構

1 玄関ポーチと玄関土間には、近くの地域で採取される緑灰色の楢原（ならわら）石と芍谷（しゃくたに）石を敷いている。**2** 玄関を入るとホールの奥まっすぐに家の最奥まで廊下が続く。**3** 小屋組みは大正年間に改修されたもの。幅を広げたため、棟木は当初の家の中心からずれている。桁には、垂木受けの穴だけが、茅葺きだった屋根の名残として残っている。**4** 吹き抜けのある「集いの間」。右奥の板戸の向こうは、家族の空間である食堂と居間。室内の壁は珪藻土塗りだ。**5** 夏には板戸を開放すれば集いの間と居間・食堂がオープンな空間となり、涼しく広々と使える

3

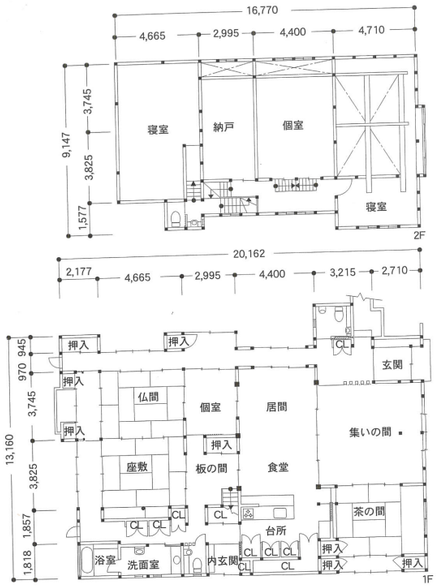
2

1

4

5

本来の架構を正しく生かす改修で、さらに住み継がれる家に



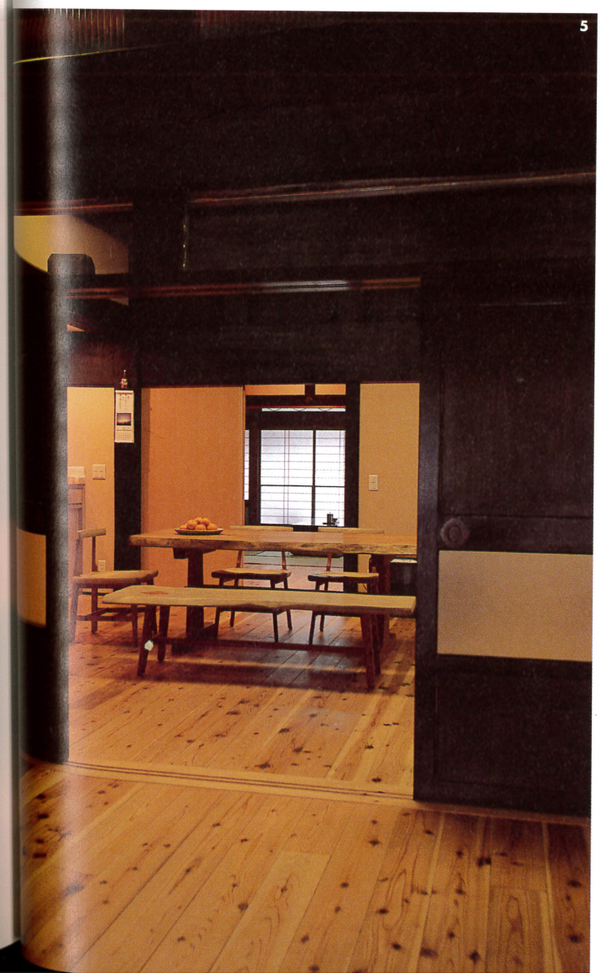
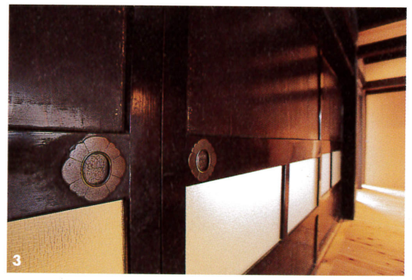
6 2階の長女の部屋。大正時代に行われた改修で新たにつくられた大屋根に囲まれた小屋裏空間を部屋にした。**7** 長女の部屋は廊下から少し高くなっている。これは、2階の奥行き全体に渡された長い梁を切らずに残すため。この梁に4段のはしごを掛けている。**8** この梁は当初のこの家の桁だったもので、棟木と同じ方向に10m以上にも及ぶ。**9** 大正、昭和の改修で「まさか」というような手の加え方をされていたため、Uさんは、今回はなるべく元の架構を切らないようにしたという。唯一切ったのは、階段のためにどうしても切らざるをえなかった、構造上影響のないこの部分

設計●松井郁夫

松井郁夫建築設計事務所
〒165-0023 東京都中野区江原町1-46-12-203
TEL：03-3951-0703　FAX：03-5996-1370
URL：http://www.matsui-ikuo.jp
E-mail：ok@matsui-ikuo.jp

HOUSE DATA

●家族構成＝母親十夫婦十子供3人
●敷地面積＝1605.00㎡
●建築面積＝251.85㎡
●延べ床面積＝376.15㎡［1階＝251.85㎡　2階＝124.3㎡］
●構造＝木造伝統構法［土台＝ヒノキ　柱＝スギ　梁＝マツ］
●竣工＝2004年6月
●設計＝松井郁夫建築設計事務所
●施工＝おだ住建
●外部仕上げ［屋根＝既存地瓦　外壁＝スギ南京下見板張り、漆喰塗り　建具＝木製建具、アルミ製サッシ　塗料＝柿渋］
●内部仕上げ［天井＝スギ化粧板張り　床＝TSウッドハウス協同組合／こもれび（スギ厚板）、畳敷き、石張り　内壁＝珪藻土塗り　塗料＝古河建材／久米蔵］
●設備［キッチン＝トーヨーキッチン／Foo　浴室＝サンウェーブ　トイレ＝TOTO／ネオレスト　照明＝ナショナル、ヤマギワ　暖房＝シームレス床暖房ほか］
●総工費＝4806万円［仮設工事費＝108万円　解体工事費＝244万円　基礎工事費＝142万円　木工事費＝1376万円　屋根工事費＝64万円　板金工事費＝72万円　左官工事費＝178万円　石工事費＝80万円　鋼製建具工事費＝129万円　木製建具工事費＝282万円　内装（建材）工事費＝197万円　塗装工事費＝125万円　給排水衛生設備工事費＝281万円　電気設備工事費＝292万円　什器備品工事費＝271万円　家具工事費＝76万円　雑工事費＝74万円　床暖房工事費＝107万円　エアコン工事費＝149万円　諸経費＝330万円　消費税＝229万円］

改修工事の風景。水まわりなど傷みやすい部分である下屋は、やはり老朽化が激しく、つくり直した。壁などを取り払い、木の骨組みがあらわになると、かつてご主人が子供のころ目にしていた柱や梁など、本来の家の姿が蘇ったという。この改修には近所でも賛否両論で、「新しいものを建てればいいのに、わざわざお金と手間をかけて」という人と、「偉い。古いいいものを大切にしてください」という人がいたという

1 いわゆるLDKとなる居間と食堂。この空間が家族みんなで一緒に過ごす場。**2** 築100年を超す古民家とはいえ文化財ではなく、家族が暮らす生活のための家。「使い勝手のよさ、住みやすさは譲れなかった」と奥様がいうように、このシステムキッチンや床暖房など、現代の暮らしに合わせた機能を備えた設備を取り入れた。**3**、**4** 板戸はずっとこの家で使われてきたものをそのまま再利用した。**5** 引き戸は、閉じたり、開放したり、取り外したりすることで空間の広がりを自在に使い分けることができる優れた建具。集いの間から居間、食堂、その奥の板の間、さらに奥の座敷、縁側まで見通すことができる